The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	方言の推量形式における意味変化 : 談話的機能へ
Author(s)	白岩, 広行
Citation	阪大日本語研究. 2011, 23, p. 57-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6730
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』23（2011）

方言の推量形式における意味変化
――談話的機能へ――

Semantic change of conjectural forms in dialects of Japanese: To discourse function

白岩 広行
SHIRAIWA Hiroyuki

キーワード：推量、確認要求、通時的変化、終助詞化

要旨

本稿では、愛知県岡崎市方言、静岡県静岡市方言、神奈川県茅ヶ崎市方言におけるそれぞれの推量形式ダラ、ラ、「ベ」を対象とし、それらの形式が、「推量」（および「疑い」）という命題に対する話し手の態度を示す用法では使われにくくなり、「確認要求」という談話的な機能に使用がかたよってゆくことを取り上げて議論をおこなった。

いずれの推量形式も、明治・大正生まれ世代のことばを記録した談話資料・民話資料では推量用法といえる例が見られるものの、現在の若年層にあたる昭和 50 ～ 60 年代生まれ世代では、推量用法での使用がおおむね不自然なものと内省されるようになっている。具体的には、生起位置は文末にかぎられ、終助詞ナとの共起も不自然なものとされるようになる。一方、確認要求用法では若年層でも変わらず使用が認められる（3 節）。

これと似た傾向は、標準語のダロウについても計量的な報告がすでにあり（土岐 2002）、推量体系が命題から切り離された、より主観的なものになるという古代語からの変化（山口 1991）を考えても、推量形式が談話的な機能（具体的には確認要求用法）へ移行しつつあるという流れが、方言をふくめた日本語の推量形式全体に関わる変化として推測される（4.1 節）。

同様に、推量形式の通時的変化としてこれまで指摘されている、近代語のいわゆる「分析的傾向」（田中 1965）や、東日本方言における「ベ」の前接形式への接続の単純化（井上 1985:ch.11）なども、談話的機能へという意味変化とつながりあった事象として位置づけられる（4.2-3 節）。

1. はじめに

標準語のダロウと同様、日本語諸方言の推量形式については、単に事態を推量する用法と、聞き手に確認を求める、いわゆる確認要求の用法を持つことが知られている（舩木 2006a; 2006b の研究展望などを参照）。しかし、より若い世代の方言に目をむけると、複数の方言において、それら推量形式が確認要求の用法にかたよって使われるようになるという変化が見られる。端的な例として、下に、本稿で議論をおこなう各方言の事例を示す（それぞれ、愛知県

岡崎市方言ダラ[1)]、静岡県静岡市方言ラ、神奈川県茅ヶ崎市方言「ベ」[2)] の例)。

（1）明日は雨が降る｛* ダラー／ * ラ／ * ダベ｝から、傘を用意しておこう。

（2）（会の参加者について考えて）あいつは行く｛?? ダラー／ ? ラ／ ?? ベ｝な。

【以上、若年層・推量用法】

（3）お前、目が赤いぞ。さては徹夜した｛ダラ／ラ／ベ｝。

（4）ほら、あそこにポストがある｛ダラ／ラ／ベ｝。あそこの角を…

【以上、若年層・確認要求用法】

（本稿の例文では、引用の場合を除き、焦点となる述語部分以外は標準語訳とする。また、各方言のインフォーマントが当該形式を「使わない」と判断した文を *、使用が「不自然」とした文を ?、使用が「かなり不自然」とした文を ?? で示す。）

本稿では、各地で内省調査をおこなった結果から、このような変化の様相について記述する。その上で、中央語の推量形式に関する通時変化をふまえ、否定推量や過去推量など複合的な形式が衰退するといういわゆる「分析的傾向」（田中 1965）や井上（1985:ch.11）で指摘されている「ベ」の前接形式への接続の単純化など、従来から指摘されていた推量形式に関する通時変化が、「談話的機能への変化」という点でつながっていることを示す。

なお、本稿の構成は以下のとおりである。まず、2 節で用法の整理をおこなったあと、3 節で各推量形式に生じている意味変化を具体的に記述する。その後、4 節で、推量形式に関して今まで指摘されている通時的変化と照らしあわせつつ、3 節で記述した意味変化の位置づけを図る。その後、5 節でまとめをおこなう。

2. 用法の整理

本節では、推量や確認要求など用法に関する基本的な概念について、標準語のダロウに関する先行研究を参考にまとめておく（先に断っておくが、標準語ダロウにおける分析をもとにした用法整理の手法は仙台市方言「ベー」を記述した玉懸（1999; 2002）、静岡県中川根町方言の諸推量形式について記述した舩木・佐竹（2004）などにも取り入れられており、方言の推量形式を扱ううえでも一定の妥当性があると考えられる）。

標準語のダロウについては、「推量」という用語の定義やダロウの基本的な意味についてなど、すでに様々な議論がなされている。しかし、具体的な用法そのものに関しては、文の命題[3)] に対する認識的なものと、聞き手めあての対話的なものとの 2 つに大別することでほぼ論が一致しており、一般的に、前者は推量用法、後者は確認要求用法と呼ばれることが多い。

「推量」という用語に対する概念づけには、事態の間接的な認識の仕方ととらえる立場（奥

田 1984、大鹿 1993a; 1993b、三宅 1995）や、断定を保留するものととらえる立場（益岡 1991）などがあるが、いずれにしてもその文で表される事態に対する話し手の認識のありかたを示すものとして位置づけられるものであり、聞き手めあて性を本来的に持つものではない。そのため、対話場面においては、推量用法のダロウで文を言い切るのは不自然なことが多く（安達 1997; 1999:206-208）、推量用法のダロウは、終助詞ナ・ネをともなったり[4] 従属節内に生起したりした場合、あるいは独話場面で実現しやすい（ただし、書きことばの場合は別である）。

（5）明日は雨だろうから、傘を持っていきなさい。

（6）たぶん明日は雨だろうと思う。

（7）たぶん明日は雨だろう｛な／ね｝。

（8）（独り言で）この分だと、たぶん明日は雨だろう。

また、疑問文に生起したダロウは疑いと呼ばれるような意味を持つ。疑いのダロウは「基本的に聞き手への問いかけを意図することなく話し手の判断成立への疑念を述べたもの（仁田 1991:44）」であり、話し手の命題に対する態度に関わり、聞き手めあて性を本来的に持たないという点では推量用法と通じるところがある。

（9）明日は雨だろうか。

（10）明日の天気はどうだろう。

以上で挙げた推量および疑いの用法に対し、確認要求用法のダロウは聞き手に確認を求めるものであり、必ず対話場面の文末に現れる。

（11）これ、君のペンだろう？

（12）ほら、あそこにポストがあるだろ。あそこの角を…

（13）仕方ないだろ。仕事なんだから。

単に確認要求用法という場合、（11）のように話し手が推量しつつ聞き手に確認するものと、（12）（13）のように推量の余地のない既知のことがらについて確認を求めるものの両方が含まれる。記述にあたって前者と後者は区別されることが多く、論者によって用語のつけ方に異同はあるが（宮崎 2005:108 など参照）、本稿では三宅（1996）にしたがい、前者を命題確認の要求、後者を知識確認の要求と呼ぶことにする。

以上の用法間に意味的な拡張関係を認める場合、推量用法をより本来的なものとして、推量から命題確認、命題確認から知識確認という連続性が主張されている（奥田 1984、三宅 1997、安達 1999 など）。つまり、聞き手がその答えを知っているような状況で「推量」をすることがその命題についての「確認」につながるということで「推量」から「命題確認」への連続性が認められる。さらに、「命題そのものに関する確認」から「聞き手が当該の知識を持っていることの確認」への意味拡張ということで「命題確認」から「知識確認」への連続性が説

明される[5)]。

以上、標準語のダロウを例として簡単に用法の整理をおこなった。特に、主に話し手自身の認識に関わる推量（および疑い）の用法に対し、確認要求用法が聞き手に対して確認行為をうながすという点で談話的なものであること、また、確認要求用法が推量用法からの意味拡張としてとらえられることを確認した。

3.　各推量形式の変化

本節では、各推量形式に生じている変化について具体的に示すことにする。まず、3.1 節では対象とする方言形式について概説し、3.2 節でいわゆる伝統方言（明治・大正生まれ世代）における使用のありかたを示す。その後、3.3 節として、若年層の場合を中心に、それより下の世代で見られる変化のありかたについて述べ、3.4 節でまとめとする。

3.1.　対象とする方言形式

本稿では、調査対象として愛知県岡崎市方言ダラ、静岡県静岡市方言ラ、神奈川県茅ヶ崎市方言「ベ」の 3 形式を取り上げる。この 3 地点をフィールドに選んだのは、由来の異なるとされる別々の推量形式がそれぞれ使われていながらも[6)]、その用法上の変化の方向性には共通性が認められるということに注目するためである。なお、このうち茅ヶ崎の「ベ」は標準語の「～う」に相当する意志系の用法（例:「さあ、行くベ（＝行こう）」）も持っているが、本稿では「だろう」相当の推量系用法を中心に見る[7)]。

図 1　調査地点

これらの形式は「①テンスが分化しない（* 行くだろうた）」「②否定の焦点とならない（* 行くだろうでない）」「③疑問表現と共起する（行くだろうか）」など、いわゆる真正モダリティ（仁田 1991）の表現として、標準語のダロウと同様の特徴を本来的に持っている（3.3 節で後述するとおり、③については若年層ではこの限りでない）。つまり、命題内容に対する発話時の話し手自身の認識を示しているという点で、推量形式として共通した特徴を持っている。

3.2.　伝統方言における各形式の特徴

ここでは、明治・大正生まれ世代のことばを伝統方言とし、伝統方言において、各推量形式がどのような特徴を持っていたかを整理する。具体的には、明治・大正世代を対象に収集され

た各種の方言談話資料・民話資料をもとに、統語的な特徴をふまえつつ、各推量形式がもともと推量と確認要求の両用法で用いられていたことを示す（民話資料については、話者の語りどおりに文字起こしされていることが凡例等から確認されるものを対象とした）。なお、使用した資料は稿末に示すとおりで、岡崎のダラについては 28 例、静岡のラについては 56 例、茅ヶ崎の「べ」については 37 例の用例が得られている。

3.2.1.　伝統方言における各形式の特徴

ここでは、構文的な環境によって整理しつつ、資料中に見られた用例を挙げ、各形式が推量用法で使われていたことを確認する。また、2 節で「疑い」の意味を持つとした例についても、ここであつかうこととする。通常の推量用法とは性格を異にしてはいるものの、命題に対する態度を表すという点では共通点があり、確認要求用法とは区別されると考えるためである。

a.）従属節内に生起した例

各形式ともに従属節内（南 1993 の C 類従属節相当）に生起した例が見られる。以下、ダラ、ラ、「べ」の順に、標準語のガ・ケドに相当する節の内側に生起した例を示す。

（14）（不祝儀の挨拶）イケンカ　チカラオトシダラーガ　オレガ　ソー　ニサンチマエニ　イキアッタ　トキニャー　‥‥
（原資料訳・さぞ力落としでしょうが、おれがそう（だなあ）2、3 日前に行き会った時には）　（愛知県教育委員会 1985:106）

（15）フジワラサン　シッテルラケン　アノ　トチザーエ　イマ　イッタ　トキニサ。
（原資料訳・藤原さん　知っているだろうけれど　あの　栃沢へ　今　いった時にさ。）　（静岡県文化財保存協会 1984:112）

（16）（戦後の進駐で米軍の戦車が網元の船を潰してしまったという話）船がぺったんこになっちゃってよ。そりゃまあ喜久本だから手を打って弁償してもらったんべけんどよ。　（茅ヶ崎市史編集委員会編 2003:194）

これら従属節内に生起した例は、文末に生起したものと違い、聞き手への確認にはなりえないため、推量用法のものとして解釈される。

b.）終助詞ナと共起した例

2 節で確認したとおり、標準語では、対話場面で推量用法のダロウを使う場合、ダロウで文を言い切ることは不自然なことが多く、終助詞ナやネが共起することが多い（安達 1997）。今回対象とした各形式についても、終助詞ナの共起した例が見られた[8)]。

（17）（店先で靴を選ぶ場面）ホーダナー。ソノ　イロナラ　イーダラーナ。
（原資料訳・そうだな。その色ならいいだろうな。）（愛知県教育委員会 1985:119）

（18）（日雇いの賃金がわずかでお金が貯まらなかったことについて）5 銭 10 厘なんて大（てえ）したもんだ。1 円なんてたまんないらな。
（静岡大学人文学部言語文化学科山本研究室堀研究室編 2004:102）

（19）そう、だんだん、だんだん海岸が狭くなっちゃってなあ。（中略）ああいうのも、方々じゅうで、堤防だ、テトラポットだって言ってよ、ついたりしちゃうから、やっぱりその加減だんべえなあ。（茅ヶ崎市史編集委員会編 2003:195）

これらの例も、標準語のダロウナと同様、推量の意味で使われているものと解釈される[9)]。

c.）文末に単独で生起した例

上の b.）で見たように、推量用法で使われる場合には基本的に終助詞ナと共起することが多いようだが、各推量形式ともに、ナと共起せずに単独で推量の意味を表す用例も見られた。

（20）（民話の一場面。姑の留守中にお櫃のぼた餅を蛙にすりかえた嫁と、それを問いただす姑のやりとり）
ほいで、「おまえ牡丹餅食やへんか（筆者訳・食いはしないか）」と。「牡丹餅食やへん」。「そいでも中に蛙がいっぱい居（お）って牡丹餅一つもなかった」「それじゃあ牡丹餅が蛙に化けただらあ（筆者訳・化けたんだろう）」って嫁御が言ったちってね。
（山本ほか 1981:108）

（21）C　オハヨー。　キョー　カゼ　フク　ヒダケガ　トーサン　イタカヤー。
D　ウラノ　ハタケニ　イルラ。
（原資料訳・「おはよう。今日は風が強い日だけどご主人はいたかね」「裏の畑にいるだろう」）（国立国語研究所 1987:48）

（22）（話の収録者に昔の農作業の話をして）だから一日三畝うなえば一人前といわれた。でも三畝うなうにはよっぽど達者でなければうなえなかんべ。
（筆者注・「うなう」とは「畑を耕す」という意味の動詞）
（あしかび郷土史研究グループ編 1978:60）

これらの例については、聞き手が命題に関する情報を知っている文脈ではなく、聞き手に対して確認行為をおこなっているとはいえない。つまり、推量用法の例にあたると考えられる。

d.）疑いを表す例

ここまで推量用法にあたる例を挙げたが、2 節で疑いの意味を持つとして掲げたような例も

ここで挙げておく。

いずれの推量形式についても、疑問詞と共起した WH 疑問の例については使用が確認された。

（23）（民話の一場面）なんかいちばんね、強い婿さんをね、貰いたいちゅうことでね、鼠がね、親が、そう思ってねえ、だれがいちばん強いだらあちゅうてね。

（山本ほか 1981:152）

（24）あれ、何の病気だっけら。元気でいりゃ若い衆だけんな、死んだの。（筆者訳・あれ、何の病気だっただろう。元気でいれば若い衆だけどな、死んだの。）

（静岡大学人文学部言語文化学科山本研究室堀研究室編 2004:140）

（25）（関東大震災の日の話）七時頃に雷がゴロゴロ鳴りだし、戸を閉めたらパタパタぶつかるですよ。何だべってね、戸を開けてみたら三 cm もある雹で…

（あしかび郷土史研究グループ編 1975:60）

ただし、どの地点においても文末表現カナなどの類義形式の使用頻度が多く、推量形式がカをともなって Yes-No 疑問で使用される例（標準語のダロウカ相当）は岡崎のダラにしか確認されなかった。

（26）（医者に対する民話の登場人物のセリフ）「あんな、あの薬はききゃあへんだらか（筆者訳・あの薬は効きはしないのだろうか）。効かん薬をくれたのか」ったら‥‥

（山本ほか 1981:163）

以上、生起環境によって整理しつつ、各形式が推量用法および疑いの用法で使用されていることを確認した。疑いの用法のうち Yes-No 疑問については未確認の地点もあるが、いずれの形式も、伝統方言のなかでは確認要求以外の用法、つまり命題に対する態度のみを表す用法でも用いられていたことがわかる。

3.2.2.　確認要求用法について

ここでは、伝統方言において、各形式が確認要求の用法を持っていたことを確認する。確認要求用法では、推量用法の場合と異なり、推量形式の生起環境は文末に限られ、終助詞と共起することも少ない（宮崎 2000 のいう当為系確認要求、つまり「君、ちゃんと宿題やってるだろうね」のような例は除く）。したがって、生起環境による整理はしない。ただし、2 節で見たとおり、標準語のダロウ研究において確認要求の用法は大きく 2 つに下位分類されることが多い。本稿でも、2 節で示したとおり、話し手が推量しつつ聞き手に確認するものを「命題確認」、推量の余地のないことについて聞き手の知識を確認するものを「知識確認」と呼ぶことにし、それにしたがって整理をおこなう。

a.）命題確認の例

命題確認とは、話し手が推量したことがらを命題とし、その命題が真であることの確認を聞き手に求めるものである（2 節の（11）の例）。静岡のラについては、これにあたる用例が見られた。

（27）A　ホーダ。　タイショーシキター　オレンカマノホーカ゜……

C　マット　グヤェー　エーッキラ。

A　ウーン。　ドーモ　ヒ　ヒ……

（原資料訳・「そうだ。大正式よりはわたしの釜のほうが……」「もっと具合よかっただろう。」「ううん。どうも」）　（静岡県文化財保存協会 1984:135）

岡崎のダラについても、標準語のサゾに相当するイケンカという副詞が共起しているために推量用法に近くも解釈しうるが、情報的には聞き手が優位という命題確認の文脈で使用された例が見られる。

（28）（民話・舌切り雀の一場面。雀の舌を切った婆さんに対して、爺さんが）

「な、かわいそうなことして、そんな舌やなん切ってね。いけんかその雀が、痛がって悲しがっていっただらあ（筆者訳・さぞその雀が痛がって悲しがって行っただろう）、…」　（山本ほか 1981:115）

茅ヶ崎の「ベ」については命題確認の例が見られなかったが、2 節で見たとおり、各用法に連続性を認める場合、命題確認は推量と知識確認の間に位置づけられる。そして、3.2.1 節および下の b.）で見るとおり、推量でも知識確認でも「ベ」は使われているので、資料中に用例が見られないだけで、命題確認の場合でも「ベ」が使用されていた可能性はあると思われる。

b.）知識確認の例

知識確認とは、話し手にとって既知のことがらを命題にとり、その命題が表す知識を聞き手が持っていることの確認をとるものである（2 節の（12）（13）の例）。この例は、いずれの形式においても確認された。

（29）（民話の中の魚を煮ている場面の語り）魚を煮ると、ほいで魚がだんだん煮えてくるだら。ほで、グツグツ煮えてくると、……　（山本ほか 1981:182）

（30）（民話取材に来た大学生に）そこ川が流れてるら、その上流。この上流が途中で分かれてんだよ。

（静岡大学人文学部言語文化学科山本研究室堀研究室編 2004:140）

（31）（荷運びの便が悪いため、共通の知人である漁師（＝北村さん）が茅ヶ崎の港では魚を揚げないという話題）だから嫌でも応でも北村さん揚げないべ、揚げないってい

う理由はそこにある訳よ。　（茅ヶ崎市史編集委員会編 2003:221）

以上、各形式が確認要求の用法で使用されることを確認した。3.2.1 節の例とあわせ、伝統方言のなかでは、各推量形式が推量・疑いおよび確認要求の各用法で使われていることが確認される。

3.3.　若年層での変化

3.2 節では、各推量形式が本来推量用法でも確認要求用法でも使用されていたことを確認した。ここでは、下の世代で起こっている変化として、各形式が確認要求以外の用法で使われにくくなることを示す。

具体的には、各地点で昭和初期生まれの世代（以下「高年層」とする）、および昭和 50 ～ 60 年代生まれの世代（以下「若年層」とする）のインフォーマントを対象におこなった内省調査の結果を提示する。内省という手法を用いたのは、各形式が推量用法で使いにくくなっているという事象は、談話資料からの分析では十分に確かめることができない（資料に出てこないだけで実際には使えるという可能性が捨てきれない）ためである。インフォーマントに関する情報は稿末に示すとおりである。また、用例の提示にあたっては、その内省をおこなったインフォーマントの世代を付記する。

以下、伝統方言の場合と同様に、用法ごとに分けて調査の結果を提示する。

3.3.1.　推量・疑いの用法について

ここでは、推量および疑いの用法で各形式が使われにくくなっていることを、実例を挙げつつ述べる。

下に見るように、従属節内に推量形式が生起するような使い方は、昭和初期生まれの現在の高年層の時点で、岡崎のダラをのぞくと不自然と内省されるようになっている [10)]。

（32）あいつが行く｛ダラー／？ラ／＊ベ｝から、心配要らないよ。　【高年層】

（33）あいつが行く｛ダラー／？ラ／??ベ｝けど、少し心配だな。　【高年層】

さらに、若年層においては全く使われないものとなっている。

（34）あいつが行く｛＊ダラー／＊ラ／＊ベ｝から、心配要らないよ。　【若年層】

（35）あいつが行く｛＊ダラー／＊ラ／＊ベ｝けど、少し心配だな。　【若年層】

また、終助詞ナをともなった例については、高年層では違和感なく使用されるが、若年層では不自然と意識されている。

（36）（会の出席者を考えて）あいつは行く｛ダラー／ラ／ベ｝な。　【高年層】

（37）（会の出席者を考えて）あいつは行く｛?? ダラー／？ラ／?? べ｝な。　【若年層】

このように、従属節内に生起した場合、あるいは終助詞ナをともなった場合、各推量形式は使われにくくなっている。一方で、文末に単独で生起して推量の意味を表すような場合は、高年層・若年層のいずれでも変わらず自然に使われるとされる。下に、独話場面での使用に関する例を挙げる。

（38）（ひとりごとで年賀状を誰に出すか考えながら）たぶん、あいつは来年も年賀状を書く｛ダラ／ラ／べ｝。俺も書いておこう。　【高年層・若年層】

ただし、とりわけ若年層話者の場合、（38）のような状況での推量形式の使用は、自分自身への確認の意味が感じられると内省されている。つまり、「あいつは年賀状を書くだろう」ということを自分自身に言い聞かせて確認し、それをふまえたうえで「自分も書いておこう」という意志決定がなされるというわけである。したがって、（38）あるいは下の（39）のように、推量形式を文末に持った発話のあとに、それを前提とした次の発話や行動が続くのが自然な流れであって、（40）のようにそこで文脈が途切れてしまうのは不自然とされる。

（39）たぶん、あいつは来年も年賀状を書く｛ダラ／ラ／べ｝。（と言って、その人宛ての年賀状を書き始める）　【若年層】

（40）たぶん、あいつは来年も年賀状を書く｛? ダラ／？ラ／？べ｝。（と言って、そのまま何もしない）　【若年層】

このことは、上のような文を「～と思う」の補文に入れ込んで談話的な機能が生じないようにすると使用が不自然になるという内省結果からもうかがえる。

（41）たぶん、あいつは来年も年賀状を書く｛? ダラー／＊ラ／?? べ｝と思う。【若年層】

なお、高年層の場合にも、若年層ほどではないが、同様の傾向は見られ、「～と思う」の補文への埋め込みは、静岡のラ、茅ヶ崎の「べ」に関しては不自然という内省が得られた[11)]。

（42）たぶん、あいつは来年も年賀状を書く｛ダラー／？ラ／?? べ｝と思う。【高年層】

ここまで見たように、推量用法の場合、各推量形式の使用は世代が下るほどに不自然なものとされるようになる。（38）のように、文末に単独で生起するような例は若年層でも自然に使われるが、その場合であっても、推量した事態を前提としながら次の発話や行動につなげるという機能があるのではないかと考えられる。

このほか、疑いの用法についても、推量形式の使用が高年層・若年層のいずれにおいても、おおむね不自然とされるようになっている。

（43）（会の出席者を考えて）あいつは行く｛＊ダラー／＊ラ／＊べ｝か。　【高年層】

（44）（会の出席者を考えて）あいつは行く｛＊ダラー／＊ラ／＊べ｝か。　【若年層】

（45）（家出した山田を探しながら）山田だったらどこに行く｛ダラ／＊ラ／＊べ｝。【高年層】

（46）（家出した山田を探しながら）山田だったらどこに行く｛*ダラ／*ラ／？べ｝。【若年層】

以上、命題に対する話し手の態度のありかたが問題となる推量・疑いの用法では、生起の環境によって差があるものの、世代が下るごとに各推量形式が使われにくくなっているということを確認した。

3.3.2.　確認要求の用法について

ここでは、確認要求の用法で各形式が使用され続けていることを例文を掲げて示す。なお、内省の結果は高年層、若年層ともに変わらなかったので、両世代あわせる形で例文を示す。

（47）お前、目が赤いぞ。さては徹夜した｛ダラ／ラ／べ｝。

（48）その荷物、重い｛ダラ／ラ／べ｝。運ぶの手伝うよ。

（49）どう？　ここのラーメンうまい｛ダラ／ラ／べ｝。

【以上、命題確認：高年層・若年層】

（50）ほら、あそこにポストがある｛ダラ／ラ／べ｝。あそこの角を…

（51）昔、うちのクラスに山田っていた｛ダラ／ラ／べ｝。あいつが…

（52）何をしているんだ。危ない｛ダラ／ラ／べ｝。

（53）だから言った｛ダラ／ラ／べ｝。あの人には気をつけろって。

【以上、知識確認：高年層・若年層】

このように、命題で表される事態の真偽を確認したり（＝命題確認）聞き手に当該の知識があることを確認したり（＝知識確認）といった確認要求用法では、世代を問わず推量形式の使用が認められる。

3.4.　変化のまとめ

3.2 節および 3.3 節で見た世代ごとの各推量形式の使われ方を、用法の面から整理してまとめたのが次の表 1 である。この表では、各用法および生起の環境を、使用されにくくなる順に左から並べている。

この表から、どの推量形式も、確認要求の用法では使われ続けているものの、推量・疑いの用法では使われにくくなっていることがわかる。特に、聞き手めあて性の希薄な疑いの用法、および聞き手めあて性というものが問題にならない従属節内での使用は、昭和初期生まれの世代ですでに「使わない」「不自然」とされることが多い。また、終助詞ナをともなって推量を表すような使い方も、若年層では不自然なものとされる。一方、確認要求の用法では下の世代であっても変わらず使用され続けており、各推量形式が「推量」という命題に対する態度に関した意味ではなく、聞き手への確認行為に特化して使われるようになっていると考えられる。推量用

表１　各推量形式の用法面の変化

		疑い		推量			確認要求	
		Yes-No 疑問	WH 疑問	従属節内	終助詞ナ共起	文末に単独で生起	命題確認	知識確認
岡崎市ダラ	伝統方言（明治大正生まれ）	○	○	○	○	○	○	○
	現在の高年層（昭和初期生まれ）	＊	○	○	○	○	○	○
	現在の若年層（昭和末生まれ）	＊	＊	＊	??	○	○	○
静岡市ラ	伝統方言（明治大正生まれ）	－	○	○	○	○	○	○
	現在の高年層（昭和初期生まれ）	＊	＊	?	○	○	○	○
	現在の若年層（昭和末生まれ）	＊	＊	＊	?	○	○	○
茅ヶ崎ベ	伝統方言（明治大正生まれ）	－	○	○	○	○	－	○
	現在の高年層（昭和初期生まれ）	＊	＊	＊	○	○	○	○
	現在の若年層（昭和末生まれ）	＊	?	＊	??	○	○	○

○：使う　？：不自然　??：かなり不自然　＊：使わない　－：未確認

法に含まれるような例のうち、終助詞ナをともなわず文末に単独で生起する例は若年層でも見られるものの、3.3 節の（38）～（41）に関して見たように、推量した事態を前提としつつ次の発話や行動につなげるという点で、聞き手への確認行為が含まれるように考えられる。

以上のように、これらの各推量形式は聞き手への確認行為がふくまれるときに限って使われるように変化しつつあるといえる。

4.　この変化の位置づけ

ここでは、今までなされている通時変化に関する研究と比較しつつ、3 節で見た用法の変化が推量形式の諸変化の中にどう位置づけられるかについて考える。具体的には、4.1 節で中央語の推量形式における意味変化を概観し、4.2 節でいわゆる近代語の「分析的傾向」との関連づけをする。また、4.3 節として、井上（1985:ch.11）で指摘されている「ベ」の前接形式への接続の単純化との関わりについて述べる。いずれも、各推量形式がより命題から切り離されたものになることで、談話的な機能（3 節であつかった変化に即して具体的にいえば、談話進

行上の聞き手に対する確認行為）に移行しやすくなったのではないかという議論である。

4.1.　中央語における推量形式の意味変化

本稿であつかった地点は、いずれも地理的に東京に近く、若年層においては標準語化がかなりの程度で進んでいる。このことをふまえると、3節で見たような変化が起こった要因のひとつとして「標準語形のダロウが普及して使われるようになったために、推量用法では標準語形に取って代わられた」という可能性も考えられる。実際、推量や疑いの用法では、方言形の推量形式は使えないが、標準語形のダロウなら使えるという内省が各地点の若年層話者から得られている。

しかし、実際には標準語のダロウも、その使用が確認要求を中心としたものへ変化しつつあることが指摘されている。下表は土岐（2002）による計量的な変化の指摘である。これは、江戸語と現代語を対象とし、会話文の文末に現れたダロウの用法を調べ、各用法での用例数をカウントしたものである。

表2　会話文の文末に現れた「だろう」の用法内訳（土岐 2002:188 より）

	推量	確認要求	計
江戸語 （東海道中膝栗毛、浮世風呂、浮世床）	162	33	195
牡丹灯篭	23	33	56
現代シナリオ （前略おふくろ様1・2、幸福の黄色いハンカチ、帰らざる日々）	94	447	541

この表からわかるとおり、江戸語のダロウは推量用法の例が約8割なのに対し、現代語では、逆に確認要求用法の例が8割を超えている。つまり、江戸期から現代にかけて、確認要求用法へと、使用の比重が大きく変化しているのである。

ここから考えると、本稿であつかった各方言の推量形式も、標準語のダロウも、意味的な変化の方向性は同じように考えられる。つまり、ダラ、ラ、「ベ」のような各方言の推量形式は変化が早く、標準語のダロウは（規範意識が強いためか）変化が遅いというだけで、遅速に差はあるものの、どちらも確認要求用法にかたよって使われつつあるのは同じである。その点を考えると、標準語形のダロウが方言の体系に組み込まれて推量用法で使われているとしても、それがダラ、ラ、「ベ」の変化の主要因とは考えにくい。むしろ、標準語を含めた日本語諸方言の推量形式が、みな確認要求の用法に意味の比重を移しつつあり、そこに遅速の差があるだけ、と見たほうがよいようにも考えられる。

そして、この変化については、より長いスパンからとらえることもできる。山口（1991）によれば、ム、ラム、ケム、マシなどからなる古代語の推量体系は「現実密着型」のものであり、ダロウ、〜（ヨ）ウ、マイからなる近現代語の推量体系は「ムード識別型」であるという。つまり、古代語の推量に関わる諸形式は事態の「現実性」を示すものであり、その点で言い表される客体としての「事柄」に密着した表現だったと考えられる。このことは前接形式との接続面にも端的に現れており、未然形接続のム（ウ）は述語の活用に深く取り込まれている。一方、近現代語のダロウは事態の現実性ではなく、「推量」という話し手の心的態度を示す形式である。動詞・形容詞に対しては終止形に、形容動詞の語幹や名詞、否定辞（ナイ）、過去辞（タ）などに対しては直接接続し、いずれも前接形式の語形変化を要求しないことからも明らかなように、言い表される客体としての事柄そのものからは切り離されており、命題として一括された事柄を受け、それに対する話し手の主観的な態度が示される。

このことを考えると、中央語の長い歴史のなかにおいて、推量体系そのものが事柄に密着した客体中心のものから、話し手の主観的な態度を示すものへと変化したということになる。これは、言い換えれば、推量体系そのものが命題に深く取り込まれたものから、より文の外側の、命題から切り離されたものへと変化したということになる。この変化がさらに進んで、より主観的で文の外側に位置するようになり、談話的な機能（より具体的には聞き手への確認行為）へ比重を移すようになったのが推量形式の確認要求への変化ではないかとも考えられる。これは、Traugott（2003）の指摘する、nonsubjective から subjective、さらに intersubjective への意味変化という（inter）subjectification の流れと同じものとしてとらえられるかもしれない。

なお、推量形式が確認要求用法に移行しつつある一方で、かわって「推量」の意味を担う別の形式は存在するのか、という疑問も生じるが、類義の形式としてはいわゆる疑似モダリティ形式（仁田 1991）や「〜と思う」、タブン、キットといった推量の意味の副詞など、複数の形式が挙げられる。また、そもそも（54）のように、推量形式もその類義形式も使用せずに推量した事態を言い表すこともありうる。

（54）西の空がくもってるから、この分だと、明日は雨だ。

ただし、本稿の主旨から外れるため、これらの諸表現に関する議論には深く立ち入らないことにする。

4.2. 「分析的傾向」との関連

近代以降の日本語の推量形式について、否定推量のマイがナイ＋ダロウという形に、過去推量のタロウがタ＋ダロウという形に置き換えられつつあるということはよく知られている。田

中（1965）によれば、このような複合的な表現から分析的表現への変化は、近代語のいわゆる「分析的傾向」の一例とされる。

この傾向は、今回あつかった3つの地点でも確認されている。つまり、伝統方言の段階では、否定推量のマイ・メーが3地点すべてで、過去推量のツラが岡崎と静岡で確認されている。しかし、高年層話者の内省ではそれらの形式はあまり使わないとの回答が多く、若年層では、まったく使わない、聞いたことがないという回答のみが得られた。つまり、田中（1965）は「分析的傾向」は中央語で顕著と指摘するが、本稿で取り上げた地点についていえば、この傾向は方言でもはっきりと確認される。

また、静岡の場合、伝統方言ではラのほかにズラという形式があり、形容動詞・名詞述語文で使われる（例：「元気ズラ」「雨ズラ」）ほか、ノダ文のノダと推量を同時にマークする（「行くラ」が「行くだろう」、「行くズラ」が「行くんだろう」相当）ことが報告されている（山口1968など）。しかし、この形式も若年層ではまったく使われておらず、形容動詞・名詞述語では「元気だラ」「雨だラ」、ノダ文でも「行くだラ」（静岡市方言では「行くだ」が「行くのだ」に相当する意味を表す）のようにラが使用される[12)]。述語形式やノダ相当の意味と一体になった形式の使い分けが失われているという点で、ズラの衰退も「分析的傾向」の一例といえる。

このような「分析的傾向」、つまり複合的表現の衰退は、3節で見たような変化と無関係ではないと考えられる。なぜなら、聞き手への確認という談話的な機能は命題からは切り離されたところで実現されるものであるから、それを極性（否定）やテンス（過去）といった要素と複合的に表す必然性はない。実際、標準語や方言の別をとわず、種々の確認要求表現や終助詞など、談話的な機能を担う表現には、命題内の文法的カテゴリーまで複合的に担うような形式はほぼ見られないように思われる。

このことを考えると、いわゆる「分析的傾向」によって、推量体系そのものが否定や過去などの命題に含まれる意味から切り離されたために、個別の推量形式（ダラ・ラ・ベ）も命題から切り離された、談話的な機能へと移行しやすくなったのではないかと考えられる。あるいは逆に、談話的機能へと移行する過程で否定や過去といった意味が切り捨てられた結果が推量体系の「分析的傾向」につながっているということも考えられる。この両変化は同時並行的に起こっているようなので、どちらがどちらに影響を与えたとも判断しがたいが、いずれにしても、本稿であつかった確認要求への意味変化といわゆる「分析的傾向」は同じ方向性を持ったものであるといえる。

4.3.　前接形式との接続の単純化

ここでは、特に「ベ」に関して指摘されていることを中心に述べる。井上（1985:ch.11）は、

東日本諸方言の「ベ」について、前接形式への接続が単純化していること、つまり、前接形式の語形変化を経ず、「ベ」がいわゆる終止形にそのまま接続するようになるという変化を示している。

用法変化を議論の中心とした３節ではあえてふれなかったが、今回の調査でも、茅ヶ崎の「ベ」について同様の形態的変化が見られている。下の表３は、茅ヶ崎の「ベ」について、前接形式との接続をまとめたものである。

表３　茅ヶ崎市方言「ベ」の前接形式への接続

	動詞	形容詞	形容動詞	名詞	否定辞	過去辞
古い形	書クベ*	高カンベ	元気ダンベ	雨ダンベ	–ナカンベ	–タンベ
新しい形		高イベ**	元気ダベ	雨ダベ	–ナイベ**	–タベ

*終止形が「－ル」で終わる動詞はルが撥音化することが多い。例）見ルベ＞見ンベ

**形容詞・否定辞の場合、実際には「タケーベ」「ネーベ」のように連母音が長母音で発音されることが多い。

表で「古い形」とした、前接形式の語形変化をともなう形は、伝統方言世代の資料では現れ、高年層でも使用が見られるものの、若年層では使用されることがない。若年層はもっぱら下段の「新しい形」、つまり前接形式の終止形にそのまま「ベ」が接続する形を用いる。

井上はこのような接続の単純化をさして「ベ」の「終助詞化」といっているが、その「終助詞化」とは単に前接形式との接続に関して言ったものであり、その生起位置が文末にかぎられるとか、意味的にどう終助詞的になったかとかいう議論ではない。

これに対して、本稿の３節で取り上げた変化は、用法が談話進行上の確認行為に移行するという点で、意味面の「終助詞化」とでもいうべき事象であった。これも井上のいう形態面の「終助詞化」とはつながりあったものといえそうである。つまり、述語の活用から切り離されるという形態面での変化は、命題から切り離されて談話的機能に意味の比重を移すという意味面での変化と一体をなすものであり、井上の指摘は前者、本稿の記述は後者をとらえたものと位置づけることができる。

なお、ダラ・ラは、用法面での変化は「ベ」と同様であるが、もとから前接形式の語形変化をともなわずに使用される形式であるため[13)]、井上のいうような形態面での「終助詞化」は顕在化していない。

5.　おわりに

本稿では、岡崎市方言ダラ、静岡市方言ラ、茅ヶ崎市方言「ベ」の３つの推量形式を取り上げ、

いずれの形式も、推量・疑いといった用法では使われにくくなり、確認要求という談話的な機能に使用がかたよってゆくことを示した（3 節）。

これと同様の変化は標準語のダロウで計量的な報告がすでにあり、推量体系が命題から切り離された、より主観的なものになるという古代語からの変化を考えても、推量形式が談話的な機能（具体的には確認要求用法）へ移行しつつあるという流れが、日本語の推量形式全体に関わる変化として推測される（4.1 節）。

また、田中（1965）のいういわゆる「分析的傾向」は、命題にふくまれる意味（否定・過去など）をも複合的に表す形式が衰退するという点で、また、井上（1985:ch.11）の指摘する「ベ」の接続の単純化も、「ベ」が述語の活用から切り離されるという点で、推量形式の体系および個別の推量形式が命題から切り離されたものになるという傾向を示している。これは、本稿 3 節で示した談話的機能へという意味的な変化と同じ方向性を持った変化である。つまり、推量体系そのものの変化をとらえた「分析的傾向」、あるいは個別の形式「ベ」の形態面での変化をとらえた井上の指摘は、3 節で示した意味面での変化とつながっており、同じ流れの中にあるものと位置づけられそうである（4.2-4.3 節）。

以上、本稿では、ダラ（岡崎市方言）・ラ（静岡市方言）・ベ（茅ヶ崎市方言）という 3 つの方言における推量形式を対象にして用法面の変化のありようを記述し、その変化を、これまで指摘されている推量形式の通時変化の中に位置づけることを試みた。

なお、本稿で取り上げた各方言には、丁寧体の推量形式というものが存在せず、対象とした形式もすべて普通体の推量形式であった（内省によれば、高年層・若年層ともに、丁寧体の発話ではコードそのものが方言から標準語に切り替わるようである）。これに対し、丁寧体の推量形式を持つ福島県郡山市方言では、確認要求に使用がかたよるという変化は丁寧体の推量形式バイのみに起こっており、普通体の推量形式「ベ」には変化が見られない（白岩 2009）。また、北海道方言にはデショウ由来の（ッ）ショという形式があり、やはり確認要求用法で主に用いられる（白岩 2008）。このように、丁寧体の推量形式がその方言に存在する場合、本稿であつかったような変化は丁寧体形式のほうに顕著に現れやすい可能性があることを最後に付け加えておくこととする[14)]。

付記

本稿は 2007 年度春季日本語学会で発表した内容をもとに手を加えたものである。また、科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「現代諸方言に見る推量形式の用法変化－〈認識〉から〈伝達〉へ－」（平成 19-21 年度）による研究の一環としてのものである。

注

1）岡崎市方言のダラは、従属節内に生起した場合および文末で終助詞を後接させる場合には「ダラー」のように長呼されることが多いが、本文中ではダラという語形で表記することにする。

2）本稿では、本文中で各推量形式をカタカナで表記するが、「ベ」についてはひらがなと字形が同じで判別しにくいため、原則としてカギカッコをつけることにする。

3）本稿では、宮崎・安達・野田・高梨（2002）や益岡（2007）の考え方、および仁田（1991）のいう「言表事態」という概念にしたがい、いわゆる命題核からヴォイス・アスペクト・極性・テンスを含む文の構成要素を命題とする。

4）安達（1997）は、推量によって導き出された自分の意見を直接的に提示するのではなく、心的なチェックを経たという態度で聞き手に示すために、「自己確認操作」を表す終助詞ナ・ネが後接しやすいと説明している。

5）ただし、この拡張関係は共時的な分析によって導き出されたもので、通時的観点によるものではない。

6）ダラはデアラウズ＜ニテアラントス、ラはラム、「ベ」はベシといった古典語の各形式と関係があるとされる。彦坂（2002; 2007）など参照。

7）意志系の用法では目立った変化が見られない。

8）地点ごとにナの特徴が多少異なる可能性もあるが、資料中の現れ方を見る限り、おおよその特徴は標準語のナと同様のようである。

9）推量ではなく、「君、宿題やってるだろうね」のように、当為系確認要求（宮崎 2000）の表現としてダロウナ・ダロウネが使われることもあるが、ここに挙げたのはそのような文脈の例ではない。

10）カラ、ケドを、方言形の接続表現（カラ相当のデ（岡崎・静岡）、ケド相当のガ（岡崎）、ケーガ（静岡）、ケンド（茅ヶ崎）など）に換えても内省の結果に差は見られない。

11）伝統方言についていえば、岡崎のダラと茅ヶ崎の「ベ」には、「～と思う」の補文に生起した例が見られる。

a）（若い娘の噂話）マー　キダテモ　ソー　ワリー　コター　ネーダラートモーケンナン

（原資料訳・まあ、気立てもそんなに悪いことはないだろうと思うけれどねえ。）

（愛知県教育委員会 1985:121）

b）（戦後の進駐軍の話）そうしたらね、戦車が走ってきて、それ夜だんべと思うな。船ぺったんこにぶっ潰して行っちゃった。（茅ヶ崎市史編集委員会編 2003:195）

12）ただし、本調査の若年層話者の一部は、形容動詞・名詞述語に対して、「元気ラ」「雨ラ」のようにコピュラを介さない形も併用すると内省している（コピュラを介する形との間で特別な意味上の違いは見出されなかった）。なお、井上（1991）の「東海道グロットグラム」の推量項目（QG27）では、用宗（静岡から 2 駅西の地点）の 10 代話者 1 名のみが「山ラ」という語形を回答している。コピュラを介さない形はその頃以降に広まったごく新しいものと思われる。

13）ダラは、世代を問わず、標準語のダロウと同様、動詞・形容詞には終止形に、形容動詞の場合は語幹に直接、名詞の場合も名詞に直接接続する。ラは動詞・形容詞の場合、世代を問わず終止形に接続する。また、形容動詞・名詞の場合、4.2 節で見たとおり、伝統方言ではラとは別の推量形式ズラが使用される。本稿で「高年層」とした昭和初期生まれの世代では形容動詞・名詞にもラが使われ、「元気だラ」「雨だラ」のようにコピュラの終止形に接続する（ズラはあまり使用されない）。さらに、若年層話者の場合、注 12 に示したとおり「元気ラ」「雨ラ」のような形も併用される。いずれにしても、前接形式の語形変化をともなわないという点では、ダラ・ラの形態的な特性は一貫している。

14）これと関連して、標準語でも丁寧体デショウのほうが普通体ダロウよりも確認要求表現として用いられやす

い（ダロウによる確認要求は男性的な文体に限定される）ことを中北（2000）が指摘している。

参考文献

安達太郎（1997）「「だろう」の伝達的な側面」『日本語教育』95
――――（1999）『日本語研究叢書 11　日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
井上史雄（1985）『新しい日本語　－《新方言》の分布と変化－』明治書院
――――（1991）『東海道沿線方言の地域差年齢差（Q グロットグラム）』東京外国語大学語学研究所
大鹿薫久（1993a）「「だろう」を述語にもつ文についての覚書き」『日本文藝研究』45-3　関西学院大学日本文学会
――――（1993b）「推量と「かもしれない」「にちがいない」 ――叙法の体系化をめざして――」『ことばとことのは』10
奥田靖雄（1984）「おしはかり（一）」『日本語学』3-12
白岩広行（2008）「北海道・新十津川方言の推量・意志表現」真田信治編『移民言語 1 北海道・新十津川方言の現在』大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室
――――（2009）「福島県郡山市方言の推量・意志表現バイ　――若年層における確認要求表現への変化――」『待兼山論叢　日本学編』43　大阪大学文学会
田中章夫（1965）「近代語成立過程にみられるいわゆる分析的傾向について」近代語学会編『近代語研究　第一集』武蔵野書院
玉懸元（1999）「仙台市方言の『ベー』の用法」『言語科学論集』3　東北大学文学部
――――（2002）「仙台市方言の『ベー』の用法（2）　－「推量」「確認」「確認要求」の用法をめぐって－」『国語学研究』41　東北大学大学院文学研究科
土岐留美江（2002）「「だろう」の確認要求の用法について」『日本近代語研究』3　ひつじ書房
中北美千子（2000）「談話におけるダロウ・デショウの選択基準」『日本語教育』107
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
彦坂佳宣（2002）「日本語方言における意志・推量表現の交渉と分化　―『方言文法全国地図』の解釈―」佐藤喜代治編『国語論究第 9 集　現代の位相研究』明治書院
――――（2007）「諸方言の束としての日本語史―『方言文法全国地図』の意志・推量表現を例に」『国学院雑誌』108-11　国学院大学
舩木礼子（2006a）「推量表現」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック 2』（科学研究費基盤研究（B）「方言における文法形式の成立と変化の過程に関する研究」報告書）
――――（2006b）「確認要求表現」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック 2』（科学研究費基盤研究（B）「方言における文法形式の成立と変化の過程に関する研究」報告書）
舩木礼子・佐竹久仁子（2004）「静岡県中川根方言の推量・意志・勧誘表現」『静岡・中川根方言の記述』大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室
益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
――――（2007）『日本語モダリティ探求』くろしお出版
南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
三宅知宏（1995）「「推量」について」『国語学』183
――――（1996）「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89

――――（1997）「「愛だろ、愛。」―推量と確認要求」『月刊言語』26-2
宮崎和人（2000）「確認要求表現の体系性」『日本語教育』106
――――（2005）『現代日本語の疑問表現－疑いと確認要求－』ひつじ書房
宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃（2002）『新日本語文法選書４　モダリティ』くろしお出版
山口堯二（1991）「推量体系の史的変容」『国語学』165
山口幸洋（1968）「静岡県方言の過去表現について」『国語学』75
Traugott, E. C. 2003. From subjectification to intersubjectification. In Raymond Hickey (ed.), *Motives for Language Change*, 31-54. Cambridge : Cambridge University Press.

資料

山本節・永田典子・山田八千代（1981）『昔話研究資料叢書18　西三河の昔話』三弥井書店／愛知県教育委員会編（1985）「岡崎市箱柳町方言」『愛知のことば　－愛知県方言緊急調査報告書－』愛知県教育委員会／大橋勝男（1995）「日本諸方言についての記述的研究（27）　――愛知県岡崎市真福寺町方言について――」『新潟大学教育学部紀要　人文・社会科学編』36-2【以上、岡崎市方言談話・民話資料】／山口幸洋編（1974）『方言文資料報告（2）　静岡旧市域方言・小笠郡大東町大坂方言（下）』私家版／国立国語研究所（1983）『方言談話資料（7）　－老年層と若年層の会話－』国立国語研究所／静岡県文化財保存協会（1984）『静岡県の方言調査報告書』 静岡県教育委員会文化課内静岡県文化財保存協会／国立国語研究所（1987）『方言談話資料（10）　－場面設定の対話その２－』国立国語研究所／大橋勝男（1994）「日本諸方言についての記述的研究（26）　――静岡県静岡市玉川地区方言について――」『新潟大学教育学部紀要　人文・社会科学編』36-1 ／国立国語研究所（2004）『全国方言談話データベース　日本のふるさとことば集成　第８巻　長野・山梨・静岡』国書刊行会／山口幸洋編（2004）「静岡県方言談話資料（4）」『静岡・ことばの世界』6　静岡県方言研究会／静岡大学人文学部言語文化学科山本研究室堀研究室編（2004）『静岡県静岡市油山・松野・津渡野の口頭伝承』【以上、静岡市方言談話・民話資料】／あしかび郷土史研究グループ（1975）『としよりの話』私家版／あしかび郷土史研究グループ（1978）『としよりの話 2』私家版／あしかび郷土史研究グループ（1979）『としよりの話 3』私家版／茅ヶ崎市史編集委員会（2002）『茅ヶ崎むかし語り』茅ヶ崎市／茅ヶ崎市史編集委員会（2003）『茅ヶ崎市史　現代４』茅ヶ崎市【以上、茅ヶ崎市方言民話（昔語り）資料】

内省調査のインフォーマント（生年・性別：居住歴）

OS1（1930 年生・男性：0- 岡崎市）【岡崎市高年層】／ OY1（1977 年生・男性：0-15 岡崎市、15-18 名古屋市、18-22 京都市、22-24 アメリカ、24-26 岡崎市、26- 大阪府豊中市）／ OY2（1985 年生・女性：0- 岡崎市）【以上、岡崎市若年層】／ SS1（1934 年生・男性：0-18 静岡市、18-22 東京都（23 区内を転々）、22- 静岡市）、【静岡市高年層】／ SY1（0-18 静岡市、18-25 東京都豊島区、25- 京都市）／ SY2（1983 年生・女性：0-18 静岡市、18-22 大阪府池田市、22- 浜松市）／ SY3（1985 年生・男性：0- 静岡市）【以上、静岡市若年層】／ CS1（1929 年生・男性：0- 茅ヶ崎市）【茅ヶ崎市高年層】／ CY1（1985 年生・女性：0-1 東京都八王子市　1- 茅ヶ崎市）【茅ヶ崎市若年層】

このほか、茅ヶ崎市の隣の平塚市出身の下のインフォーマントからも協力を得て、CY1 と同様の内省結果を得ている。

HY1（1977 年生・男性：0-27 平塚市、27-32 京都市、32- 平塚市）

各インフォーマントの方々、およびその紹介をしていただいた関係のみなさまに、末筆ながら厚くお礼申し上げたい。

（博士後期課程学生）
（2010 年 8 月 19 日受付）
（2010 年 9 月 27 日修正版受付）
（2010 年 10 月 14 日掲載決定）